【第１グループ】

第３回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.11.21（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第１グループ】

（1）参加者

第１グループ参加者名簿

＜グループ討議①、③＞

氏名	所属	備考
太田　明成	飲食店経営	
熊谷　耕太郎		
紺野　文彰	通訳ガイド	
松田　邦子	陸前高田市女性団体協議会	
菅野　秀一郎	陸前高田市商工会青年部	
小野寺　浩樹	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
吉田　真	いちのせき市民活動センター	グループ記録

＜グループ討議②＞

氏名	所属	備考
及川　満伸	陸前高田市消防団	
永田　宗義	吉田燃料ガス事業	
細谷　一		
武蔵野　美和	主婦	
小野寺　浩樹	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
吉田　真	いちのせき市民活動センター	グループ記録

（2）第３回の目標とゴール

【目　標】地域コミュニティ・防災というテーマのまちづくりのイメージを深め、より具体化する。

【ゴール】予想以上に具体的なイメージが深まり、目標設定や建設的なアイデア出た。次回会議への期待感が高まる

（3）検討概要

※市民会議の進め方について共有

・地域コミュニティ・防災について、前回までに出されたキーワードや意見を踏まえて、改めて地域コミュニティ・防災というテーマを考えていくことで進めていった。

【地域コミュニティ・防災】＜グループ討議①＞
・イベントが多すぎるのではないか？開催日時もかぶることも多いので、集客が望めない。
・どうせ行うなら一カ所で集約して開催した方が、集客効果も期待できると思う。
→その反面、イベント集客に関する競争原理が働かなくなるといったことも考えられる。
・イベント自体は、一時的に多くなっているという現状もある。
→残るイベントは残っていくが、次第に減少していくことも予想される。
・イベント開催において、外部団体の協力を得て開催しているものが多いが、やはり行う主体は市民であって欲しい。
・イベント開催を取りまとめるコーディネーターも必要だ。
→商工会や観光物産協会などが窓口となり、できるのならば先頭に立って仕切って欲しい。
・地元の人がイベント活動に費やす時間よりも、イベントの方が多い現状がある。（イベント疲れ）
・お祭りとイベントに関して、イベントが多いという事柄の中には、お祭りは含まれない。
→お祭りに関しては、地域の物だという特色が強く、今後も残っていくだろう。

・防災に関して言えば、既存のコミュニティと仮設住宅に住んでいる方の新規コミュニティを、どのようにつなげていくかを考えていくべきだ。
・地域での防災に関する取り組みとして、自主防災組織や自警団などが活動している。
・危険な場所や避難場所をしっかりと伝えるためにも、防災マップの作成は必要だ。
→地域住民が一緒に防災マップについて考えて、作成していくことが重要だ。
・防災マップ作成時には、先人の知恵も取り入れる必要がある。（過去の体験、過去の事実）
・防災と地域コミュニティは、切っても切れないものだ。

・地域コミュニティを考える上で、コミセンの役割とはどういうものか？
→若い人も年配の人も、世代を越えてつながれる場所であり、世代間交流の場所でもある。
・既存コミュニティがバラバラになった所もあり、コミセンの機能がうまく果たせていない所もあるのではないか。
・コミュニティを考える上で、今のコミュニティの現状を考えて議論することと、こんなコミュニティだったら良いなという思いで議論することでは、まったく違う。
→現状のコミュニティ状態を考えた上での議論で進めていくべきだと思う。

・防災マップの作成に関しては、2つのものが考えられる。
→現時点で災害が起こった時のことを考えた防災マップ
→行政と地域住民と一緒に考えて作成する防災マップ
・現時点で災害が起こった時のことを考えると、マニュアルとしての防災マップは必要だが、行政と地域住民が一緒になって考えた防災マップの方が、実際に生活している住民の意見も取り入れることができるので、有効的に活用できるのではないか。
・防災マップ作成において住民の意見は必要だが、肝心の住民は中々集まらないのではないか。

・お祭りに関しては、子ども達が楽しめるものか？参加者が継続していきたいか？といったが事柄が根源にあると思う。
→そういったお祭りやイベントは残っているし、子どもの時に楽しかったお祭りやイベントは、大人になってから残していきたいと思うようになった。

・イベントが多いということだが、仮設住宅内だけで行う閉鎖的なイベントや、主催者の自己満足で開催されているイベントもある。みんなでやればもっと良いものができると思う。

【地域コミュニティ・防災】＜グループ討議②＞
＜グループ討議①＞の振り返り
コミュニティを形成していく中で、イベントやお祭りを通した人とのつながりは必要なものだ。その中でイベントは今後集約されていくもの、お祭りは地域に根付いていくものであり、まちづくりにおいても関係あるものだ。また地域コミュニティと防災は切っても切れない関係があり、ここでいう防災には、子どもや高齢者の見守りなどのコミュニティ間でのつながりに影響されるものも含まれる。そんな防災の取り組みとして防災マップの作成に関して話を深めていくこととなる。

・地域の防災ということであれば、消防団が関わりを持っているのではないか。
→実際に消防団は、防災のことだけを行っているわけではない。それこそお祭りや地域の運動会、同窓会の企画、その他の地域行事に関しても関わっている。
・消防団＝祭組と言えなくもない、地域を担っている存在かもしれない。
・消防団内では、世代間のつながりもあるし、地域とも深く関わっている。ただお酒を飲んでいるだけではなく、地域の問題点や課題点なども語っている。

・防災という話で言えば、陸前高田は水関係の防災意識が重要だ。
→津波だけではなく、集中豪雨や河川の氾濫などにも目を向けるべきだ。
・土砂崩れに関するハザードマップ作成も必要になってくると思う。
→作るにしても、いい加減なものではいけない、しっかりと検証し考えたハザードマップが必要だ。

・防災マップを作ることで地域を再確認することができるのではないか。
・防災マップは、消防団、行政、地域住民の三者が考えて作成していけばよいのではないか
→ここでいう地域住民とは、部落単位での地域住民。

・新しいコミュニティの中には、うまく機能しているところもある。
→震災という同じ体験をしたもの同士でのつながりは、世代間のしがらみのないコミュニティとなる
→お互いが共感し合える、コミュニティでの一体感が強まりやすい。
・新しくできたコミュニティの方にも、防災に関する取り組み、お祭りに関する取り組みに参加してもらいたい。もっと良くなるはず。

・地域としての単位は、部落単位であり、浜は漁港単位のものもある。
・部落単位だと、細かい地域のことまで良くわかるし、誰がどこに住んでいるかも理解できる。
→防災マップを作成する時に、その地域の状況に合わせたものが作成できるのではないか。

・防災マップを作るだけではなく、実際に逃げてみることが必要だ。
・防災マップを作る上では、世代ごとの目線で考える必要もある。
→高齢者目線での防災マップ
→子ども達目線での防災マップ
→障がい者目線での防災マップ
→工事業者目線での防災マップなどなど

・実際に逃げて、逃げた場所での避難生活を考えた取り組みもいいかもしれない（防災ピクニック）
→各世代が参加することで、それぞれの世代で必要な避難グッズが再確認できる
→持参した避難バックの中身で、本当に生活ができるのか検証できる
・防災ピクニックの取り組みに、消防団も巻き込めないだろうか
・防災マップ作りは、逃げ地図の取り組みとも抱合せられそうだ。
→防災マップの取り組みとして逃げ地図を作成し、実際に検証する意味で防災ピクニックを行う
それにより、防災マップの見直しもできる。（自分の防災意識に関する見直しも大事だ）
・世代ごとの目線をそれぞれ共有する意味では、見直しは大事なことだ。
・逃げ地図は米崎・小友・広田では行ったが、他の地域でもやって欲しい。（特に高田町！）
・地域で逃げ地図を考える事は、もちろんその地域の方のためにもあるが、外部から来た人にも分かるような仕組みを必要だ。
→防災マップ作りは、自分達の地域のために行うものではない

【地域コミュニティ・防災】＜グループ討議③＞
＜グループ討議②＞の振り返り
防災マップを考える上では、地域を守りそして担っている「消防団」、「行政」、「部落単位での地域住民」の 3 者が中心となれば良いのではないか。地域住民に関して言えば、子ども、高齢者、妊婦、障がい者等の様々な世代の目線を踏まえた上で作り上げていくことが重要であり、逃げ地図といった取り組みと合わせることもできる。また防災マップを作った上で、実際に避難し、さらにはその避難場所で生活をする「防災ピクニック」といった取り組みも行ったらどうかという意見もあがっている。防災ついて地域で検証し確認することが、実はコミュニティの再確認にもつながるのではないか？ということを踏まえて、グループ討議が行われる。

・防災マップを作り、防災ピクニックを行うことに関して消防団が関わるのはどうかと思う。
→消防団が行うこと＝防災への取り組みではない（あくまで火消だ）
・消防団自体が崩壊しているところもある。
→人員不足、再編されていない、屯所がない、本来守るべきエリアに住んでいない。

・防災マップを作成する 3 者について、まず行政がたたき台として防災マップを提案して欲しい
→たたき台がない真っ白な状態からの防災マップ作りには、住民は参加しないと思う。
・世代ごとの防災マップ作りに関しては必要なことだ。
→防災マップを作って終わりではなく、やはり何度も見直すことが大事であり、何度も実践することも大事である。

・地域住民が主体となる防災マップ作成の流れ
① たたき台としての防災マップ（行政にお願い）
② 様々な世代ごとの防災マップ＋逃げ地図作成
③ 実際に避難し、その後の避難所生活についても考える（防災ピクニック）
④ 体験したことに対しそれぞれ検証を行い。世代別の注意点や課題点なども共有する
⑤ 改めて防災マップを見直し、場合によっては再度防災マップ作成、防災ピクニック等を行う。

・何度も防災マップ作りを繰り返すことが大事であり、繰り返すことで記憶の風化も妨げる。
・防災マップの作成時には、住民自らの震災時の体験も取り入れていくべきだ
→過去の津波の記録。避難した時の実体験、避難所生活時の体験。
→書面などで残すことも大事
・その地域ならではの体験といったものも、防災マップ作りには欠かせないだろう。
→地域のことを一番知っているには地域住民だ
→地域の防災関わる声をもっと拾っていくことで、その地域ならではの防災マップが完成するのではないだろうか。

・消防団に関して言えば、ポンプ車は各分団に装備されたが、屯所がない所が多い。
→屯所がないと団員同士のコミュニケーションが図れないこともあり、活動に支障が起こってくることも考えられる。
・屯所を作るにしても、場所をどうするのか、再編をどうするのかといった問題もある。
・冬場になると火を使うことが多くなるため、火災が増えることが予想される。
→仮設住宅では長屋構造になっているため、火災予防の取り組みも重要となってくる
・地域で活動しているのであれば、各コミセンに屯所機能を盛り込むことで、消防団としての機能を維持することはできないだろうか
→防災力もそうだが、地域力の高めることにつながるのではないか
・根本的に団員は不足しているので、団員を増やすための取り組みも重要だ
→まずは消防団に興味をもってもらうことが大事、飲みに来い！
・消防団の力が、地域コミュニティに大きく関与していると言ってもいい

（4）検討経過

地域コミュニティ・防災	＜地域コミュニティ＞ ◎お祭りは地域の財産であり、地域の特色も現れる ◎地域コミュニティと防災は切っても切れないものだ ◎現状の地域コミュニティを見据えた視点での展望 ◎地域コミュニティを支える消防団の存在 ◎地域住民の単位は部落単位だ。浜に関しては漁港単位のものもある ◎新しいコミュニティの良さがある →震災という共通の体験をしたことから生まれる、しがらみのない、一体感のあるコミュニティの形成 ＜防災＞ ◎行政と地域住民が一緒になって考える防災マップ作り ◎子ども目線、高齢者目線、障がい者目線、工事業者目線での防災マップ作成 ◎防災マップ作成に逃げ地図の要素を取り入れたらどうか ◎防災マップに従って実際に避難し、さらには避難所での生活も体験もする防災ピクニックを取り入れたらどうか ◎逃げ地図の取り組みを、ぜひ高田町で！ ◎外部から来る人達のための防災マップ作り ◎消防団の崩壊（人員不足、屯所がない、組織の再編問題、） ◎住民の体験談などを防災マップに活かす（場合によっては書籍で残す） ◎屯所の機能を各コミセン盛り込む（屯所が出来るまでの活動場所として） ＜地域住民が主体となる防災マップ作成の流れ＞ ① たたき台としての防災マップ（行政にお願い） ② 様々な世代ごとの防災マップ＋逃げ地図作成 ③ 実際に避難し、その後の避難所生活についても考える（防災ピクニック） ④ 体験したことに対し、それぞれ検証を行い、世代別の注意点や課題点なども共有する ⑤ 改めて防災マップを見直し、場合によっては、再度防災マップ作成、再度防災ピクニック等を行う ＜イベント・観光＞ ◎イベント行うなら一カ所で集約して開催した方が、集客効果も期待できる ◎市民が主体となるイベントを開催 ◎イベント開催を取り仕切るコーディネーターが必要 ＜お祭り＞ ◎子どもが楽しめるお祭り、参加者が楽しめるお祭りは残していきたいし、残していこうという思いが地域のつながりにもなる ◎消防団＝祭組、地域の担い手

地域コミュニティ、防災

コミュニティのあり方

地域のもの　祭 ≠ ライフスタイルが変わってる

どこで何をしているの？

人が集まらない

集約していた方がいい ←→ 義務原理が効かなくなる

高齢、福祉、食とかが

自分となって コーディネートしてない

消防の要所と兼ねてたらいい

コミュニティと祭の関係

コミュニティのあり方　地域の拠点

地域のつながりで防災力の向上

ガードマン、工事者のマンパワーがあった方がいい

世代間交流ができていること

人と人がつながっていること

③ 実証

④ 見直し

② 防災ビジョン

世代ごとの目線

防災マップ＋逃げ地図

① 以前は、内容を変えていた

前より危険な高所にきている

危険箇所の再発見必要

大人の知恵は大切にすべき

防災

地域と防災 … 消防団

子どもの見守り

いつも地域のことを考えて いっぱい活動している

必要

① 地域を知る

ストックを活用する

消防団はバスに乗ってでかけている

子どもの底辺に残る

たたき台必要

防災

① 分担が分って配る

② 住民で時間をかけて作る

防災と住民が一体になる

どう住民を巻き込むか、ムズかしい

避難車両

コミュニティの形成 → まちづくり → 祭などの継続

消防団に参加してほしい

消防団は参加してない

消防団＝祭組

飲みこい！

地域を担っている集団

拠点がない

消防団の前途 … ちかい ちかい ちかい

両立できない

しばられない

コミュニティ

守らなければいけない

エリアがないから

新しい部署

新しい祭組

消防団

新しいコミュニティは 意識が同じだから 強くなる

強くなりません

問題：

ほぼ、流れている

好奇心

別の部署の 意見を集約 会議を再開 を理解してない

お祭について

1/6(1)

- 楽しめるもの
- 子どもも参加できるもの
- 残したいと思えるもの
  思うもの
  ↓
  残っている

※イベントが多い
- 仮設的イベント
- 開放的なもの

陽・祝日がくると
とまる

みんなでやろう → 主体者の自己満かな

前半
コミュニティ — まちづくり → 祭り・伝統の引継ぎ

- コミュニティ ← イベント（今後は集約していくこと）
  お祭り（地域のもの）
  ↳ 人とのつながり
  地域のつながり → 防災
  ↓
  防災だけは
  誰・誰の
  見守り

防災マップ
- 行政がつくったもの
- 住民でつくるもの

コミセンの役割

1/6(3)

- 若い人も年配の方も年代を超えてつながる場所
- 世代間交流の場所
- 規模だったコミュニティもバラバラになったところ
  ↳ 何ができるのか → New コミュニティ(ズ)の話
  別物
  → こんなコミュニティがいい話

防災マップについて

① マニュアル・教材集のようなものを配る（行政）
② 地域住民が考えてつくるもの（市民サイド）

地域コミュニティ × 防災について

1/6(7)

（前回の記録から考えてみて）

お祭・イベントについて
- 多すぎではないか？
- 余裕をあまり…（時間的な）

↳ どこかが取りまとめて開催（地元の人がコーディネート）
まきだしイベント：町内が集まって
↳ イベントも

- 残るイベントとお祭
  - 地元の人のついでの時間 < 外部のイベントの多さ
  - まだそのことはできない

昔からあったお祭りとイベントの関係性

防災と地域は別のできない

防災
- 規模をコミュニティ・町内コミュニティ
- どうつなげていくか
- 地域で自主的・自主警

防災マップを地域の人と一緒に考える

※他人の意見も耳のうめて

地域の防災マップ

1/6(12)

- 消防組の重要性
  消防団＝条例
  ↳ 地域とも深い関わり
  世代間のつながりもある
- 防災のことだけではない
  ↓
  お祭・運動会・地域作業

防災＝水関係
- 津波だけではなく豪雨など
- 土砂崩れのハザードマップ
  ↳ いいがかりなつくりは×
  早くつくるよりもしっかりと

地域コミュニティ
過去のいいところを
良いものを残して
再生を図る

防災マップをつくることで

1/6(5)

地域を再確認
消防団・行政・地域住民 ← 部落単位

新しいコミュニティの中には、うまくいっているところもある
↳ 同じ体験をしたといつながり
↳ しがらみのないものとしてのコミュニティになるかも

新しいコミュニティのいかしち？
防災 ↗ 祭り 関われる

若い人の居住のため
学術・文化
大事

地域の単位は

1/6(6)

- 川は部落単位 ← 知かいところが分かる
  誰かどこに住んでいるか
  理解
- 浜は漁港単位

防災マップをつくる時 → 実際に逃げられる
- 高齢者用
- 子供用
- 障がい者用

つくれるのでは
工事業者のスコップ
消防団も
合わせて

地域別の防災マップ
↳ コミュニティのこわれているものを

防災ピクニックで再生を!!
（いろんな世代が集まり）
（ものごとを考えるきっかけ）
住民・子どもが
今まで知らなかった実際
知られるから

逃げ地図
逃げ地図と合わせて

逃げ地図として完成したものを
防災ピクニックでお話し…
- 小崎でやっているが、他の地域でも、特に高田!!
- それぞれの地域でつくることも ↔ 外部の方のためにも

防災の関点から → コミュニティ形成へ

1/6(7)

- 消防団だけに頼るのではない
- 消防団にもっと人を!!

防災マップを作成時（現実は…）
- 消防団・行政・住民の3者であれば
- 行政が一度出して、一度マニュアルを!!（たたき台）
- 何もないものには、住民は参加しないのでは？

- 子供だけで防災マップを ← 見直しも重要
- ママだけで防災マップを
  （あるものをずっと使うのではなく）

① マニュアル → ② 住民へ配る → ③ 説明する

防災に関して

1/6(12)

- 市に頼るのではなく → 住民自らの体験を
  一つ一つ出していく
- 防災の意識を保つためには
  火災等考える
  ↳ マップをつくるだけではなく
  ↳ 体験したものを実践して!! → 行動が大事
  ↳ 逃げた、避難所生活
  男性の視点、お年寄りの視点、子供の視点、もちろん行政の視点、
  ↳ もっと出てくるはず → その場所は？
  コミュニティ？
  学校？
  市内外へ？

消防団 → 消防車は配備されたが
先行がない — コミュニティーのつながり

【第２グループ】

第３回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.11.21（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第２グループ】

（1）参加者

第２グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
村上　清	Ａｉｄ　ＴＡＫＡＴＡ	
松本　直美	陸前高田市観光物産協会	
金澤　忍	えぇ町作り隊	
坂井　ふき子	教員（中学校）	
佐々木　牧恵	いちのせき市民活動センター	グループ進行
黄川田　美和	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

氏名	所属	備考
伊藤　昌子	おやこの広場　きらりんきっず	
三井　俊介	特定非営利活動法人　ＳＥＴ	
石川　浩行	陸前高田市青年会議所	
武蔵　和敏	会社員	
佐々木　牧恵	いちのせき市民活動センター	グループ進行
黄川田　美和	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

（2）第３回の目標とゴール

【目　標】「地域コミュニティ・防災」「教育・子育て」の新しいまちづくりのイメージについて、より具体的意見を出し合う。

【ゴール】予想以上に具体的イメージが深まり、建設的アイデアが出た。

（3）検討概要

【テーマ】地域コミュニティ・防災

①コミュニティとは

・コミュニティとは田舎ならではの（まとまり、小さい単位　）つながりだと感じている

→まとまりはあると思っているし地域に育てられたと感じている

→震災後絆が深まった（まとまりや、つながり）あると思う

・共通項や同じ経験に基づくものであり、だからこそ安心感につながるもの。

②コミュニティに関する現状

・地縁など「物理的なコミュニティ」と、好きなもの（祭りなど）の「目に見えないコミュニティ」、震災後に「凍結したコミュニティ」と３つに分けられる。

＜物理的なコミュニティ（地縁）について＞

・元々住んでいた地域に戻りたいと考えているが自分がいた地域は解散してしまった

→よかったと昔を懐かしむだけではだめ、これからどうして行くかを考えていく事が必要

・新しいコミュニティと昔のコミュニティでの迷いがある

→今まで（コミュニティ）の形に戻れないと感じている反面行事（祭り）があれば元の地域に戻りたい。

→新しい場所に慣れていかなければとの思いと、元の地域での居心地の良し悪しを感じる。

→今置かれている所でのいいコミュニケーションが、これから子供が生まれた時のお祭りに参加させたいという想いにつながる時がある。

→子どもがコミュニティを作って行く上でポイントになると感じている

・現在の仮設住宅での新しい地縁のコミュニティも必要だが、復興計画が見えないと難しい。また、集会所などもないため、活動しにくい。

＜目に見えないコミュニティについて＞

・元のコミュニティを知らないからこそ感じた事として

→祭りを通してバラバラの場所にやむをえず住んでいる環境に置かれてもしまっても人は集まると感じた。

→つながりを感じる事が出来るツールの一つになる。同じ経験や体験をする事がみんなで大変なことも乗り越えて来た事の自信につながり最終的によかったと共通の感覚や思いを共有して行く事が大事

・祭りでのつながり、目に見えない絆

→祭りはもともとのつながりが感じられるものであり参加しやすさがある
コミュニティはこれから新しいものを作って行く段階だからこそ色々な形で参加したいと思う

③今後の課題

・昔ながらの古いつながり、震災後始まった新しいつながりをどう生かすか

→今までの人とのつながりを財産として行く事も考えていかなければならない。

→新しいまちをつくる時には以前のコミュニティに戻りたい気持ちがあるが今のコミュニティの形も良いものになって来た。

→昔のコミュニティの良さと、今のコミュニティの良さをどうマッチングして行けるかがポイントとなる。

・新しいコミュニティを作りだすために必要と思われる事として

→今までのつながりを活かしながら、定住、人口の増加につなげて行かなければいけない

→人がいなくなってしまっては、コミュニティは成り立たない

・震災がきっかけで祭に参加しやすくなった　⇔　持続可能性の問題

→昔はすべて自分達でお金を出し合いながら、山車の制作は勿論、（山車）を作る場所も自分達で作りそして集まる場所だった

→外からの支援ではなく、自分達の祭りの為に、自分達のお金を出し合いつくりあげて来た祭りが今は形を変えているからこその、参加のしやすさなのかも知れない
→若い人たちの力や実行力がありがたいと感じているがしかし、年配者と若い人達の間には壁がある様に感じてしまう。
→震災後支援があったからこそ祭りが出来たしかし、これから山車を引くところに民家は無い
→今までの様にお花（お金）がもらえるとは限らない。資金面での心配
→これからの事を考えた時自走出来るのだろうか（今は出来てもこれからは、難しいのではないか）
→高田町はこれからが難しいのではないか。
→新しい今の物を活かしていく事は出来るか。
→地域はしがらみがある好きな事が出来ない環境やフインキがある。
・今の環境での地縁コミュニティ構築に向けた仕組みづくりの必要性
→以前の地縁コミュニティを再生することは難しい。新しいコミュニティを作っていくべきであるが、そのためのシステムや目標を定めるべき。また、新しく入って来た人や震災後に戻って来た人たちとの関係性作りも重要。
・地域間の格差
→震災以前のコミュニティのつながりに地域間の格差が大きい。その差が現在につながっている（バラバラになった後のつながりなど）。
→その絆の強さが今後障害になってこないか。地域間の差にどう対処していくかが課題。

【防災について】
①防災教育について
・防災教育を進めて行きたい
・防災教育と一口に言っても「市民レベル」「まちレベル」「後世に向けたもの」「全国・世界に向けたもの」と、対象によって内容は異なる。
・大きい地震が来たら川に行くなと教えられた事が今頃になって思い出される
（川津波の恐ろしさを聞いて来た。実際体験しないと分からなかった）
（津波は海だけではない、川も川津波と呼ばれるものがある、地域や場所によっては山崩れも考えられる事の一つ）
※石巻の小学校がまさに川津波
→逃げる場所が悪かった、どこに逃げればいいのか知っていれば助かったのではないだろうか）
・語りついで行く事の大事さ
→ただ話をしていくのではなく、何が大事なのかがわかる様に伝えて行く形が重要だと感じる
→語り継がれた話が逆に危険なことも
（「あの時は〇〇まで津波が来たから、〇〇まで行けば大丈夫」など、経験からの思い込み）
・想定外の想定が重要
→考えられることを全て盛り込んだ防災訓練を地域で行うべき

②津波浸水域の表示について
・震災の爪痕を目に見える様にして行く事が大事
→年配者からの話を聞きたい
・広田に石碑がある事を皆さんあまり知らない

→今防災風土来を先生たちが作っている
・眼に見えるものとして昔の人達は石碑を作った
→ここまで津波が来たのだと知らせるものを今作ってしまう事は、工事の都合場無駄に感じてしまう。
　目印がある事で危ない事を知らせる事が出来る
→大事なことは、知る事そして実際にもっと大切な事は逃げる事、見てここまで来た事がわかって終わってはダメ。
→今わかるのはパッケージプラザだけになってしまった。
・線で知らせるのではなく、高さでどこまで来たのか分からなくてはいけない
（一関の市内にある　カスリン台風　アイオン台風の水位の様に）
　眼に見える形で見せて行く事が必要
そしてこれからの事を考えると、逃げるところも知らせる事が大事（矢印などを活用）
→電柱や建物の壁など、お金のかからない方法はあるはず
※今自分がいるところは安全なのか、危ないのか、分かる様にかつ見えるところに
③研修の提供について
・防災も大事だが減災の考え方も今後必要
（声を掛け合いながら逃げる、普段からの意識）
→学校だけではなく地域としてやって行くべき
→子どもたちの為に、地域が中心となり親、年輩者、子供のつながりを施設にして行きたい
→日本すべての場所で震災は起きる、何もない所でも生きていける生きる力を身に付けさせたい
（火おこし等子供が他紙しいと思えるところから学ばせたい）
・市内全域でそれぞれの防災に備えて訓練をしていく活動があると良いのではないか
→避難所とはどんなものなのか　体験をさせる事が訓練になり備えになる
→県外の人達のも市内の人達と同じ訓練をさせる事が出来るシステムを考えてはどうか
→避難場所はお寺や神社が主だった、体験させるための仕組みを考えてはどうか
（宿泊、食事、体験、お土産、他のもつなげる事がたくさんある）

・今が学ぶチャンスだと思う
→経験や体験を伝えて行きたい。研修の受け入れ（震災時のリーダーシップとは）

・国連防災会議を 2015 年に高田でやりたいと考えている
→世界に向けて発信して行く事の必要性と防災教育として取り入れて行くために
→高田の子供に向けて　世界の子供に向けて

・人と自然の共生が重要。海と共生している事例として売り込む。

・避難所（運営）資格を全国に先駆けて実施検定（検定なので検定料金がかかる様にする）
→雇用につながる様に内容を充実させる
→検定料としてお金が入る仕組みを作る。
→高田の小学校や中学校を卒業する時には資格が取れる仕組み
→修学旅行に来た時に検定を受けられるようにする。
→内容として、簡単なものではなく、難しい内容にしておくことが必要

④その他

ハード面にお金を使わなくていい

これからはソフト面人の為に防災教育を進めて行くために使って欲しい

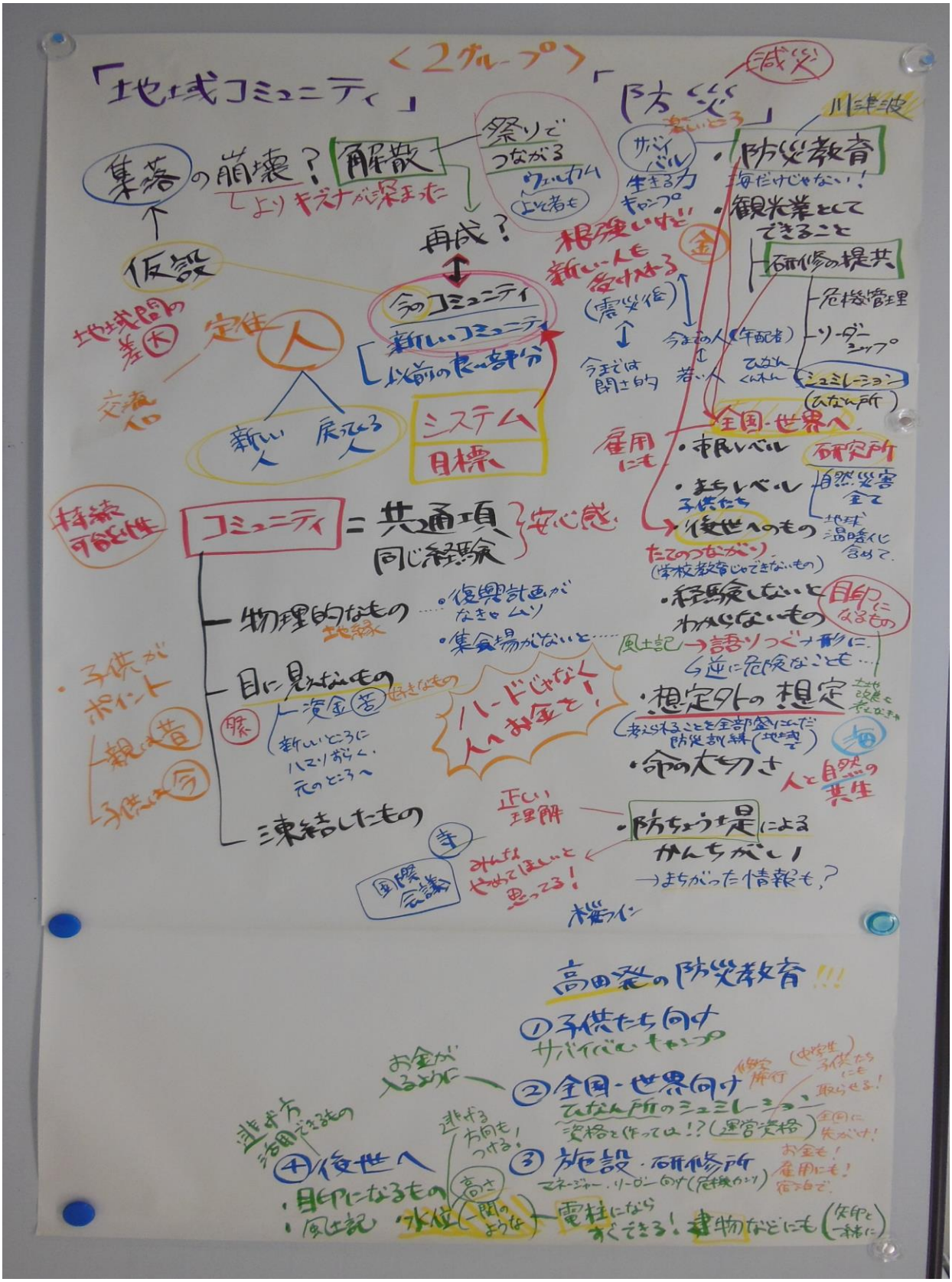
→施設も必要だが人が生活して行くためには住む所がしっかりしていなければいけない

→オリンピックの工事が始まると、東北の工事はストップしてしまう

（4）検討経過

地域コミュニティ	≪地域コミュニティ≫ ＜物理的なコミュニティ（地縁）について＞ ・元々住んでいた地域に戻りたいと考えているが自分がいた地域は 　解散してしまった ・新しいコミュニティと昔のコミュニティでの迷いがある ＜目に見えないコミュニティについて＞ ・元のコミュニティを知らないからこそ感じた事として ・祭りでのつながり、目に見えない絆 （震災がきっかけで祭に参加しやすくなった　⇔　持続可能性の問題） ・昔ながらの古いつながり、震災後始まった新しいつながりをどう生かすか ・新しいコミュニティを作りだすために必要と思われる事とは何か ・今の環境での地縁コミュニティ構築に向けた仕組みづくりの必要性 ・地域間の格差 （今までの絆の強さが今後障害になってこないか。地域間の差にどう対処して 　いくかが課題） ≪防災≫ ・防災教育とは 「市民レベル」「まちレベル」「後世に向けたもの」「全国・世界に向けたもの」

	と、対象によって内容は異なる。 ①防災教育を進めて行きたい ・語りついで行く事の大事さ ・想定外の想定が重要 （考えられることを全て盛り込んだ防災訓練を地域で行うべき） ②津波浸水域の表示について ・震災の爪痕を目に見える様にして行く事が大事 ・線で知らせるのではなく、高さでどこまで来たのか分からなくてはいけない ③研修の提供について ・防災も大事だが減災の考え方も今後必要 ・市内全域でそれぞれの防災に備えて訓練をしていく活動があると良いのではないか ・避難所（運営）資格を全国に先駆けて実施検定（検定なので検定料金がかかる様にする ④その他 ハード面にお金を使わなくていい これからはソフト面人の為に防災教育を進めて行くために使って欲しい


「地域コミュニティ」
<2グループ>
「防災」
集落の崩壊？
解散
祭りでつながる
ウェルカム
上と者も
再成？
仮設
今のコミュニティ
新しいコミュニティ
以前の良い部分
人
新しい人
戻ってくる人
定住
交流人口
地域間の差
システム
目標
持続可能性
コミュニティ＝共通項
同じ経験
安心感
物理的なもの
地縁
・復興計画がなきゃムリ
・集会場がないと……
目に見えないもの
資金
新しいところにハマりながら、元のところへ
リードじゃなく人へお金を！
・子供がポイント
親は昔
子供は今
凍結したもの
国際会議
みんなやめてほしいと思ってる！
正しい理解
・防ちょう堤による かんちがい
→まちがった情報も？
横ライン
減災
川津波
サバイバル
生きる力キャンプ
・防災教育
海だけじゃない！
・観光業としてできること
研修の提共
危機管理
リーダーシップ
コミュニケーション
ひなん所
根強いけど！
新しい人も受け入れる
震災後
今までは閉鎖的
今までの人（年配者）
若い人
ひなんくれん
全国・世界へ
雇用にも
・町レベル
・まちレベル
子供たち
後世へのもの
たてのつながり
（学校教育じゃできないもの）
研究所
自然災害全て
地球温暖化含めて
・経験しないとわからないもの
目印になるもの
風土記
語りつぐ→形に
逆に危険なことも……
・想定外の想定
考えられることを全部盛りこんだ防災計画（地域で）
・命の大切さ
人と自然の共生
高田発の防災教育!!!
①子供たち向け
サバイバルキャンプ
お金が入るとき
②全国・世界向け
ひなん所のコミュニケーション
資格を作っては!?（運営資格）
全国に広げよ！
③施設・研修所
マネージャー・リーダー向け（危機管理）
お金も！雇用にも！宿泊で！
進む方向できるもの
④後世へ
・目印になるもの
・風土記
・水位（一関のような）
高さ
進む方向もつける！
電柱にならすぐできる！
建物などにも（矢印と一緒に）

地域コミュニティ・防災 2G ①

コミュニティーとは いったどこから
まとまりの あると思っている
地域にそもそも 生まれ、
きずなが深まった と思っている
外からの人たちと
元いた地域にもどってほしいと思う
自分の住んでいた地域は「ライン」になった
若い人たちの力があったらと思っている
新しいものを作るとき 前のコミュニティーは…
方のコミュニティーも いい形になっている
方 新 をどうミックスしていくか?

前のコミュニティーはどうなっていくか?

② コミュニティーとは 小さい「タンイ」
おかしを思えただけでもよい。わかるようなつながり
もっとつながり 新しいつながり
方での人とのつながりも「サンイサン」
(ゆるい)なんと コミュニティーとなる
新しいコミュニティーを作るためには?
↳ 今までのつながりをなくしながら
↳ ライフスタイルの人の「普通の」
元々のコミュニティを知らない が
それでも 若い人 やる時 なると「バラバラ」
トなって いる人達が つながっていると感じた
若者があると つながりを感じられるものが

防災について ⑤

防災教育 すすめて行きたい。
↳ 小学校がチャンスだと思う
↳ 「ゲーム」「体験」 ってえる
↳ 地域修学の受入れ(震災時のシミュレーション)
↳ 語りつぎ で行く
↳ 市民として 市民としてそれぞれの
地域での 防災を「ハンキン」させよう!!
↳ シュミレーション(防災)

グループチェンジ ⑥

・防災教育 (じいちゃん、ばあちゃんの話から)
大きな地震が来たら 行かない (つなみ)
体験 なんと わからない
・防災より減災 なのではないか?
声をかけあって「にげよう」
・小さな「気づき」
・九巻の 小学校がなくなった「つなみ」
・逃げた場所がわかった
↳ どこに逃げたらいいのか? (あっていれば)
・場所 つなみ、体験をしていても
防ぐ方法 がある事で 安心に
つながってしまった

コミュニティとは「何」? ③

祭を通じて 同じ「ライケン」になるが
みんなが 参加 は思い 楽しい と感じられる
見外の人も 祭りに参加する事 「楽しい!!」

新しいコミュニティ 古いコミュニティでよい?
今までの コミュニティ は もとより
それでも 祭りの時 古い地域 もとりたい。
おもしろいと思う → 楽しやりたい 参加したい。
と思える。
3.4年 がうれしい 祭りに参加 やすい

震災 がきっかけ
↳ 祭り 参加 がしやすくなった
↳ 方 で は しかあった 色々な人が 入りやすくなった。

④

住む場所 の問題がある
自分 すべて自分達で お金を出しあって
「そうこ」も 作って そこの 暮らす場所 にした
新しい のつくりをすすめるために
システム や 目標 を具体的に。
・自分は 若人が中心となったが
ねんれいの人と若人との「かべ」「ミゾ」が見えた
・震災後 支援 はあったが こわかった
・人のいない 所を歩いても お茶(お金)の
・ジュウ? 出来るのか?
・今は 出来 もこれからはむず!!

コミュニティの「システム」
しっかりして 行く事が 大事

⑦

・自分の 親
こんな 町のつくらないで下さい。
「ちゃんと」 作るのは いいか?
↳ 安全 で 安心 できるのでは ない。
・自然災害 で 小さい 弱 が 強い
↳ 津波、つなみ (地震 自然災害 の 弱点)
↳ 力だけ に 強い つよい
「ハードに お金を 使わないで いい!」
人の ために 防災 に 使って ほしい!
人と お金 が 人が 住めるようにする
事が 必要。オリンピック が スタート すると
東北 での 動き が 少くなる
松原 が 見えなくなったら (つなみ)
わからない!

⑧

「ちゃんと」 の 使っても なくても いい!
子ども たち の ために
やさしい が 中心 親、ねんれい、子 の つながり
日本 すべての 場所 で 震災 に おそ
何 もない 所 で も 生きて 行ける 「生きる 力」
↳ 火 の おこし 方 と 暖 い と こ ろ が な
目に見える.. 物理的な 物 (地震 で
今 の もの 古い もの を どうして 行 く か?
新 しい 地域 の 入りすぎ、古い 地域 の
足 を 運ぶ 事 が ふえる
3.4 年 が コミュニティー の 「力」 になる
新しい 古い 物 を うまく マッチング
できたら 一番 いい と 感じる。

⑨

高田 は「楽しい」
↳ 新 と 今 の もの を いかして 行く
古い なかま を 今 の つづいている。
まかい 同じ 事 の「くりかえし」
地域 は にぎやか で 楽しい!
好きな 事 が 出来る ように。
祭り が あるから こ その つながり が ある
もともと 住んで いた 場所 での 参加 した。
今 いる 所 と なる コミュニティー に 入って 参加
クループ チェンジ
新 しい コミュニティ を 考え

⑩

防災 について 話して 聞いていた。
↳ 語りつぎ でいく カタチ が 重要
目に見える カタチ にして 行く 事 が 必要
安心 すると「あぶない」
防災 減災 について。
コミュニティー (高田 として やる 或 として)
↳ 学校 だけ で なく、地域 として
やって 行 く べき。
↳ つなぎ は 自分 で しっかり やる、つ も ある
小 も くず れる
↳ 市内 全部 で それ ぞれ の 防災 を
そなえて、ぎり 様 していく。
↳「ひなん所」 は どんな 物 か?
訓練、練習 する。

⑪

外の人 内の人 が 交じり 合う 様 の
システム の 中 で やる 事 が 必要 となる
国連 防災 会議
2015年 に 防災 会議 を 高田 で やろう
・世界 に むけ て 発 信 して 行く 事
・防災教育 として とり入れて 行く ため に
高田 の 3.4 年 に むけ て
世界 に むけ て

「ひなん」 は お寺 や 神社 が あ る 。
体験 する 事 で 高田 に お金 が
入 る 「仕組み」

⑫

元 の 人 (ひと) が あった 事 を 語 る 人 が 少 な い。
防災 ふうどき を 先生 たち が 作 っ て い る。
目に見える 物 として 看 を 作 った。
目 じ ゃ し と は 今 や ま と 今 作 る と
わ か ら な く なって しまう。
↳ 目じゃし が 見える と あぶない。
↳ 大事 な 事 は 逃げる 事
↳ 見 て お も った で 終わ って しまう。
地 生 活 今 わ か る の は パッケージ
プラス だ け 西 で は なく 高 で
「こ ま で 来 た」 が わ か ら な い と 「ダメ」
逃 げ る 所 も 知 らせ て お く 事 が 必 要

⑬

高 で わかるように
今 自分 が いる 所 が
安心 な の が そう で は ない の か を
わかる ように 見える ように して いく
「ひなん所」 しかく、うんえい を
知 る 事 。全国 に さ が す て お 金 を
ひ ら り「ひなん」 で や る
↳ たとえ ば もっ と が る。 遠い 人 も つながれる!
↳「お金」 も ひ ら る。
↳ 小 中 学校 卒業 する と「七 歳 の
そ な え る 事 に な る
↳ 修学旅行 で 東北 時 も 使 ら?
地 元 に しむ ず び に 感 じ で

【第３グループ】

第３回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.11.21（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第３グループ】

（1）参加者

第３グループ参加者名簿

＜グループ討議①、③＞

氏名	所属	備考
及川　満伸	陸前高田市消防団	
細谷　一		
三井　俊介	特定非営利活動法人 SET	
武蔵野　美和	主婦	
佐藤　大輔	いちのせき市民活動センター	グループ進行
三浦　まり江	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

＜グループ討議②＞

氏名	所属	備考
紺野　文彰	通訳ガイド	
菅野　秀一郎	陸前高田商工会青年部	
金澤　忍	えぇ町つくり隊	
坂井　ふき子	教員（中学校）	
佐藤　大輔	いちのせき市民活動センター	グループ進行
三浦　まり江	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

（2）第３回の目標とゴール

【目　標】「地域コミュニティ・防災」「教育・子育て」の新しいまちづくりのイメージについて、より具体的意見を出し合う。

【ゴール】予想以上に具体的イメージが深まり、建設的アイデアが出た。

（3）検討概要

【テーマ】教育・子育て

＜グループ討議①＞

○深めたいテーマ

防災

・ フラッシュバックがあるとは言え、子ども達に伝えたい。（専門家にフォローをもらいながら）
　→どうやって伝えていくか？…学校だけでなく地域でも。

・ 防災教育とは？
　→釜石のような事例。命は自分で守るもの。“てんでんこ”を見直すことと、それができる子育て。

・ 防災を絡めた世代間交流
→子ども達が高齢者の施設や老人クラブの集まりなどに参加し、世代を超えて繋ぐ。
→震災以前はそういう機会が少なからずあったが、震災後は老人クラブが解散。交流の機会を増やすことが必要。
・ 防災だけでなく、安全教育という考え。津波以外も含めて、今後を見据えて色々な視点を取り入れる。

スポーツ

・ 高田町には野球、サッカー等のスポ少があったが、震災後は環境ががらりと変わった。様々な事情から諦めてできなくなった子供が増えたのではないか。
→「いつまでに」というものはないけれど、できるだけ早く“できる場”を作ってほしい。
・ いわて国体にあわせて強化・育成プログラムが実施され、実際に強化に繋がっている。継続してほしい。
・ スポーツだけでなく、単純な体力作りをする場所もない。（例：自転車の練習など）
→遊歩道の整備。また子どもが平等に選べるようにしてあげたい。
・ スポ少の規模は縮小：人数減少、移動手段がない（親の送迎体制など）が影響
・ 肥満防止の運動もある。まずは体力作りから。
→震災前は幻のラジオ体操第 3 のレコードが博物館にあった。そのことを活かせないか。
→ゆめちゃん音頭と抱合せるなど、小さい子供も出来るところから。
⇒場が無くてもできるものもある（ウォーキングなど）
・ 総合スポーツ施設の様なハードの整備、場所の整備はとにかく急いでほしい。
→子どもの一年は大事。
・ 以前のイベントが復活できないくらい被害が大きかった。
→逆に被害にあった道路を走ってもらい、見てもらう。感じてもらうことで防災にも絡められる。
イベント例）現状を知ることも出来るマラソン大会など
・ 震災でコミュニティが壊れてしまった。仮設コミュニティでの子供を囲む環境はどうなっているのか？
→近隣住民による見守りが案外できている。
→震災以前、日中は“地域が子供を見てくれる”という安心感があった。

芸術・文化

・ 気仙はスポーツには熱心だが、反面文化・芸術に弱かった。支援で多くのアーティストが訪れている今、芸術に触れる機会が増えた。これをきっかけに、芸術の側面を強めたい。
・ 高田には美術館が無かった。そのため、作品を保存する機関もない。小さいころから芸術に触れることで、情操教育に繋がる。
→縁のあるアーティストはいるので、その人たちに協力してもらいたい。ワークショップなどで。
・ 伝統芸能を大事にする機会がなかった。次の世代へ伝えていきたい。
・ 本を読まない人が多い印象がある。親が読まないと子どもも読まない。
→震災後図書館は「子供向け」と「大人向け」に別になってしまっている。
・ 伝統を継ぐのは大人。子供にはもっと新しいものに触れてほしい。
→写真を撮影するイベントがあったが、良さを発見するのは大人よりむしろ子どもの方。

子育て

・ 子育て世代のお母さんたちをフォローする施設がほしい。
・ 子育て世代にとっては“コミュニティが良い”とばかりは言えない。
　例）子どもと一緒にくつろげるカフェなど

＜グループ討議②＞

芸術・文化

・ 知る機会がない、という話がグループ討議①ではあった。実際はどうか？
　→神楽などの芸能は高田町には少なく、むしろ周囲の方が多い。（高田町には七夕があるため）
　→芸能祭の様な伝統芸能を一堂に集めるイベントは無かったし、地域行事や学校行事は大体同じ日に実施される傾向。そのため、他の地区のものを見ることができない。
・ 伝統（七夕等含め）の背景を正確に理解しないままに関わっているので伝えられていないのではないか。大人が知らないものは子供も知らない。郷土の歴史・文化を教育、正しく認識することが必要。
　⇒自分達のまちがどんな歴史・文化を持っているのかを地域で意識していくこと＝**地元教育**
・ 地域には教えられる人がいる。望まれれば喜んでやってくれる。
　→教える側（高齢者）と教えられる側（子ども）を繋ぐ人がいればできる。
・ 地元教育はできそう。パターンとして二つある。
　①地域が主体になった連続講座
　②学校と地域が連携して総合学習の時間で実施
　→学校側ではカリキュラムや教材があれば取り入れられる。
　→反面、先生は転勤していなくなってしまう人たちでもある。

歴史

・ 高田の歴史は深くて長い（例：金）。そういう話を子どもたちは知らない。
・ 詳しい人がいれば繋がる…いなかったら誰が繋ぐか？
　→すでにそういうことをしているグループ（老人クラブなど）と繋がりを持つ、ボランティアで行って話すなど。

地元教育

・ **地元と教育がつながる。**
・ 先生は誰でもいい。要は最初の一歩が大事なので、まずはやってみること。
・ 子どもが聞きに行くという形でも良い。お年寄りは喜ぶ。
・ こういう教育が良いという共通認識があればいい。
　⇒地域を素材にしたカリキュラムは、地域にずっと残るものになる。
　⇒地域を語れる子どもを育てる

地域の人材

・ 人材マップがかつてはあった（キャリア教育の一環である職業体験用）が今はなく、学校が準備するのは大変。各所と連携するとやりやすい（パイプ、調整役）。
　→震災前は職業体験のパイプ役を商工会、PTA 等が担っていた。（高田に事業所が多かったため）
・ 地域コーディネーターを活用し、地域と学校のコーディネーターに。

⇒先生が転勤しても地域と学校の繋がりが残る。

・ 地域の歴史は観光などの全ての元。大人が知り、子どもに伝え、外の人にも伝えることができる。
⇒地元に愛着もわく

本を読む習慣

・ 定期的に読書をする習慣は学校でもない。本を読むのは大人になってから。
→文化が無かった。また、大きな図書館もない。

＜グループ討議③＞

・ 住田テレビの事例：子ども達が地域のお年寄りに取材。
→子どもが地域に出て行ってインタビュー。まとめるところがあればできるか。

・ 子どもを連れて失ったものを掘り起こす、再考するをテーマに。
→古いものを知る事で、新しいものをつくることに繋がっていく。

子どもと地域の接点

・ 以前は「土曜クラブ」という接点があったが、今は無い。

・ “子ども達の先生になって”という話はお年寄りは喜ぶし、子どももきっと面白いはず。
→先生の候補：地元の職人、支援に来ている人、お母さん　など

・ どういう人が繋ぐのか？：中間になれる人

・ 読み聞かせで話を聞かせる、図書館の活用、仮設のサロンで勉強会など
→図書館は拠点になれる。**こういう機能を図書館に追加**してはどうか。

子育て

・ 子育て世代の母親は 1 人になれるスペースがほしい。外で何かしていても気にならないようなものがあるといい（仕切りなど）。

地域にいる先生

・ 職人が先生に。色々なスキルを持った先生は既にいる。

・ 子どもだけでなく、大人も学びたい。
→子ども、中間の大人、お年寄り＝三世代揃う

・ 学校の授業以外でもできる。

・ **地域主体**：職人が先生の**地元教育**。
→場所は図書館、先生は地域に人たち、職人。

・ 誰が引っ張るのか？：そういった NPO が地元にはまだない。
→地域の中にはできる人がいる。

・ 誰が繋ぐ間になる？⇒この場に参加している私達

まとめ

①子ども達に地域の歴史、文化を伝える**地元教育**

②有効に使われていない**図書館を拠点**として活用

③地域との接点を持つ＝**世代間交流**

（4）検討経過

教育・子育て	＜防災＋教育＞ ◎防災を絡めた世代間交流（子ども・大人・高齢者） ◎心のケアに気を付けながら、防災の事を伝えていきたい ＜スポーツ＞ ◎ラジオ体操、ウォーキング等小さな子どもでもできる体力作りから ◎個性的な指導者がいると楽しい ◎現状を知る事ができるスポーツイベントの企画 ＜芸術・文化＞ ◎支援の繋がりを活かして子ども達に新しい芸術に触れてもらいたい ◎地域の歴史、文化、背景を知る機会を作る＝地元教育 ◎地域が主体になる連続講座、学校と地域が連携して総合学習の時間に取り組むなど ◎地域を素材にしたカリキュラムをつくり、地域を語れる子どもを育てる ◎伝統、歴史を知る事で新しいものを作る事に繋げる ＜子育て＞ ◎地域が子どもを見守る環境も大事だが、母親世代へのケアも必要 ◎子どもとくつろげる場、自分だけのフリースペースがほしい ＜図書館の活用＞ ◎地元教育の活動拠点として有効活用する＝世代間の接点に ◎仕切りなどを作って、子どもにお話会、母親はゆっくりできるようなスペースを設置する

テーマ「教育・子育て」

③

防災

・子ども達が考えられる場
周囲の親・大人 ↔
フィールドワーク
・三二保育園 高レ者施設と併設 老人クラブ解散
見守りの人
訪問
世代間交流（防災・交通など）
↳仮設の子どもたちどう過ごしてる
↳近所づき和できてる
見てくれてる

スポーツ

家族では数えられないコト
・スポーツ…そうげい大変
選択しを増やしてあげたい
国体プログラム…強い子育ってる
・場所…自転車乗れない
できるコトから
↳イリロード
スポーツ施設早くほしい
・体力づくりから…ラジオ体操 +ゆめちゃんかんど
小さい子でも参加できるもの
個人的な指導者
エアロビクス
ウオーキング
マラソン大会…まちを走ることで現状知れる
イベント企画

歴史

・全部取れた
・子どもたち知らない
地元の人（先生）+支援に来てるアーティストに協力してもらう
若者も参加
ワークショップ
↳新しいアート表現に触れたい
・美術館ない
保存する機関がない
小・中で教えてる
まつりの場 運動会
伝統芸能…知る機会が少ない
色が地味
本を読まない、図書館 大人と子ども別になっている
歴史の背景を知らずに育ってる
↳外から先生呼ぶ…講演会（大人）
講座（子ども）わかくたについて
お寄りの連絡
①地域住体講座
②学校との連ケイ
総合的な学習
地域との連ケイ
NPO法人
地域へ呼び出し
子どもを外へ
地域の人材マップ
職業体験
↳学校で保護者の大変
↳パイプ役（商工会）
継続のための節目
PTA
地域コーディネーター
地域を素材にしたカリキュラム
↓
地域を語れる子ども

芸術・文化

住田テレビ

・地域のじいちゃんばあちゃんへインタビュー

子育て

・親のケア
子どもとくつろげる場
↳自分だけのプリースペース

土曜クラブ

・地域の人が先生
接点…お話会をセッティング
○○広場
図書館の活用

調理

仮設空室
食べ物
職人
スミ焼き（パイナップル）
出前講座

誰が？

・学芸員
・社会教育担当
・まずは地域に持ち帰って話してみる
・

子どもを連れて
失ったものを掘り起こそう

教育・子育て

<1R> 3G-1

3深めたいテーマ?

防災 例 フラッシュバックがあるとは言えず子どもたちに伝えたい

- 当門寺フロー はもちろんのこと伝えていきたい
  - ↳ どうやって伝えていくか? ― 学校だけでなく地域でも
- 防災教育とは? ― 基本のような
- 防災教育 ― 命は自分が守るもの。"みんな"と見直すこと。もちろんのこと
  - ↳ 他と切り離すことはなく。
- 番組等の施設などが、世代を超えて
- 震災前はなかった? ― 住吉団地が一時閉鎖することはあった。(仮設住宅)
  - ↳ 防災を深めて。
- もっと機会を増やす
- 防災だけでなく、包括教育という考え。今後を見据えて色々な視点で
  - ↳ 他国の外国人
- セイクラブは震災時は会えなかった

スポーツ

- 西田町 ― 野球・サッカーなどのスポーツ → 環境はバラバラ。増えた
- あきらめて辞めなくなった子どもが増えたのは…
  いまだとゲームやテレビ・ゲームなどが早く"夢を作る"!
- 国体に合わせて育成プログラム → 強化につながっている。継続して。
- 単純に自転車や練習するところが多い
  ↳ 外国人を巻き込む必要。― スポーツ以外でなく他のボランティア
  子どもに大きなバネ・刺激

伝統は大人が子どもにはもっと新しいものにふれてほしい。3G-3 <1R>

写真も素材。良くないっていうのは子どもの方。

3育て 3育て世代のありかたを考えるフロー図施設

"コミュニティ"が良いとかボランは言えない

子どもと一緒にくっつきがちなんとか…

スポーツ ― 練習が多い: 人数がムリ・時間の不足。親の送迎がたいへん。 3G-2

伸びバンフ ― ラジオ体操等 いっぱいがっこうはあったー とれも深かして

(ひかり学園) 番号のん番号表示と挙げる。小さい子どもできるところから

個性的な指導者 ― 子どもはよろこぶ

楽しみとともに学ぶ ― (専門はあるんだろうけど)

必要なスポーツ施設のようなもの ― 連絡はいっぱいなるのか

必要だって思ってもらっていない ― 子どもの目は大事!

ツールド三陸 ― チャリ時の道路整備

前のパートが機能できないくらいから来る(挑戦)

↓

見に行こうと思ってもらい。見てもらう。刺激にも繋がる。

コミュニティが繋がり広がる仮設コミュニティ。子どもたちが回ってる。

↳ 学外で学べる

↳ 日中地域が子どもを見てくれる"どっち学に悩みがあった。

現代はスポーツには無関心 ← 文化にふれる

↳ 基盤って一番大きい。機会が増えた

能にきっかけにしてほしいなと。

西田には美術のんはなかった → 小さい頃から美術にふれることで。

↳ 西田にゆかりのアーティストに協力してほしい

じょうもん教育につながる。

伝統芸能 発表大事 に参加する機会がなかった ― 伝えていきたい

本を読まない 人が多い ― 親がとりだがる子どもも?

↳ 図書館は"子ども向け""大人向け"コーナーの別

3G-1

<2R>

家族の文化 知る機会がない

国体は今あるのか? ― 現在、大会数はあるが(クラブ)

(例年ver) 学校等で発表する機会がある

大会にも参加

↳ 学校(運動会)、外で発表

↓

西田に体育館 ― 七夕があるから。 大人がある 子どもの会

↳ 周囲の方が多い。

"芸能チップ"のような物はない ― 他の地区の伝統はわかりにくい

伝統(七夕など) ― その背景と正確に理解・学ぶ必要。

↳ 郷土の風土・文化を教育・正しく記憶・学ぶ。

自分たちが"どんな風土・文化を知っているか"を地域で! 発信して!

↳ 地域教育

地域の人たちは教えられる人がいる。"未来"がどうこんなこと考えて

関係になってくれる人がいれば 体験学習 ― 子ども

① 普 地域が主体になって事業を展開。 } パターンはいろいろ。できる!

② 学校と地域が連携している 地域学習・時間割

↳ 先生たちは外れ、教育はいろいろ…

学校はカリキュラム・教育が"あれば"カリキュラムを考える。

歴史

西田の"史"は深く長い ― そういう話を子どもたちは知らない。

新しい人材・来がつながる ― いなかったら誰が? ― 人材

↳ 既にあるいろいろなグループ(老人クラブ etc)とつながって行って

"ボランティア"がいろいろ出ている etc.

<2R> 3-2

地元教育 地元を知る教育 パンフ作成。

地元は"知ってもらい、母は最初の一歩。やってみること。

子どもが関心に近くて"もいい ― 学年毎ではよろこぶ"

こういう教育が良い とかいろいろ文面・記載が"あればいい。

↳ 良いと思うものをやる ― 下のが変わっていく

↳ 地域と学校がセットでやっていく

地域の人材 人材はある!

人材マップ

キャリア教育 } 学校に頼れるのは大変

各所と繋がっていると"やっぱい (パンフ・資料・学校)

地域コーディネーターとの活用 ― 地域と学校のコーディネーターに

↳ 見せる・知ってもらうことが必要

地域

観光などの金の元

大人が知る → 子ども伝える → 外の人にも伝えられる

↳ 地元に魅力をもわく!!

本を読む習慣 定期的な習慣は学校がない

↳ 読む力は大人になっても

↳ 文化がない…

大きい図書館がない。

震災前は南北

↳ 子どもの割合が多くなってきている

<3R> 3G-1

住田TV ― 地域のにいばあに取材

↳ 子どもたちにつながればいいな―

子どもが大きくなって行ってインタビュー → まとめることが重要!!

"知ってもらう振り返ってもらう" ― 新しいものでもいい。

身近 古いものを知ってもらうこと。新しいものをつくることにつながっていく

どちらの方にも子どもがいい。

子どもと地域の接点 以前は"土曜つながり"があった。

今は…

"子どもたちが地域になってる" = おじいさんおばあさんはあっこ子ども

↳ 地域の人が"つなぐ" 地域・学校・子ども・ボランティア

子どもたちも"おもしろい"

中学生 } 高校生

高校生

読み聞かせ・話を聞かせる

図書館活用 ← 拠点にはある

仮設のサロンで"発表会

ミニ・ツ 拠点を図書館に広げ

3育て

ママ・4人になれるスペースが欲しい (ほっとする・ほっとの…)

外で何かしてもらえるようなもの。

地域にいる先生 (職人が地域に。いろいろなものにもっと地域をないる

子ども・ドリでなく、大人も学びたい

↳ 子ども・大人・お年寄り → 2世代"揃う

学校の授業以外でもできる

地域主体・職人が先生の地元教育

↳ 地元には知れない・分からない

場所がある

↳ 図書館・竹田

<3R> 3G-2

語が違う・洗練の仕方?

地域の中にはそれぞれ人がいる

↓

難しくなく・面白くなる → この場に参加している事情

何かなる

↳ 何かっていう生活…

① 子どもたちに地域・授業・地元・地域を

伝える"地域教育"

(地元を知る)

② 各所に頼れる人がいる。同業種と連携

(色々な所と)

③ 地域の魅力・セイ・地方活性

食べ物がたくさん多い。

↳ 一緒にやってくる (いろいろな人たち)

↳ まちなかたちの様子を伝える

↳ 地域のおいしい食べ方を考えるもの。

【第 4 グループ】

第 3 回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.11.21（木）

開催場所：陸前高田市庁舎 4 号棟第 4 会議室

【第 4 グループ】

（1）参加者

第 4 グループ参加者名簿

＜グループ討議①、③＞

氏名	所属	備考
伊藤　昌子	おやこの広場　きらりんきっず	
石川　浩行	青年会議所	
永田　宗義	吉田燃料店ガス事業	
武蔵　和敏	会社員	
鈴木　麻里子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
酒井　菜穂子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

＜グループ討議②＞

氏名	所属	備考
太田　明成	飲食店経営	
熊谷　耕太郎		
松田　邦子	陸前高田市女性団体協議会	
松本　直美	陸前高田市観光物産協会	
村上　清	Aid TAKATA	
鈴木　麻里子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
酒井　菜穂子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

（2）第 2 回の目標とゴール

【目　標】「教育・子育て」の新しいまちづくりのイメージについて、より具体的意見を出し合う。

【ゴール】予想以上に具体的イメージが深まり、目標設定や建設的アイディアが出た

（3）検討概要

〇確認事項

・ゴールの確認

・後半の席移動について

・4G のテーマ「教育・子ども」

グループ討議①

〇テーマ「教育・子育て」で話したいこと
・10 年後 20 年後を見据えた、具体的に実現できる目標（長期的と短期的）。また、若い親への支援について。
・地域の学力向上。広い観点で話がしたい。
・人材育成。一度高田を出ても地元に戻ってベンチャー企業を興すくらいの子供を育てる。
・子供たちが、これまで地元ではできなかった経験ができるようなまちにしたい。

【学力向上】
・市内に学校以外に学ぶ場（塾等）はあるが、移動や送迎に課題がある。
・保育園・幼稚園から基盤を作り、小学校・中学校から底上げが必要。
・学校も努力している。宿題量を増やすなどで対応を考えている。
・高田独自のシステムを作れるよう、市民の意見を吸い上げていきたい。
・先生方も努力している。
・住民の意識を子供のために向くように促す。
・いつもインフラが先で教育・文化が後回しになる。
・教育より子育て。
・図書館のようなオープンスペースが必要。集中できるように仕切りはあるが、一人ではなく誰かがいる環境。

・地域での学習サポート
小学生でも宿題の量が多い。できる子はいいが、できない子はどんどんおいていかれるのでは？
→地域差もあるが、学校で補えない部分は「家庭で」となる。では親が教えられる状態にあるのか？
→仮設住宅では勉強スペースがない。集会所を開放しても、そもそも仮設内の中学生が少なく、使う方も勇気がいる。
→集会所では在宅の子供が利用しにくい（親も送迎が負担）。
→学童保育に教員を配置すれば学習指導が可能になる。
→中学校に設置されている「学びの部屋」事業を小学校にも設置する（空き教室を利用）
→放課後の空き教室利用は、同じ宿題を持った友達がいて親にとっても安心な環境。
→高齢者をシニアボランティアとして学習サポート役に採用するなど工夫できる。

【人材教育】
進学等で高田から出て立派になった人も大勢いるが、震災を機に戻ってきても、高田では企業していない。将来帰ってくる子供たちに、どんな魅了的なものを高田に作れるか？
→これまでは、小さい頃から「こんなとこに居るな」「出て勉強しろ」と言われて育つ。
→親が子供に高田の良い所を伝えて育てることが重要。
→コミュニティがしっかりしているのは良い所だが、範囲が小さすぎて高田全体で考えられない。
→子育てをして感じるのは親育て。親の意識を変えていく。

【親教育】
・自分たちのまちを自分たちで作っていこうという自覚を、親が持つことから始めるべき。（高田の文化、誇り、郷土愛を育む。）
・親も悩んでいる。しかし、地域や環境への批判が多ければ、子供たちの耳に入っている。
・親同士のシンポジウムや勉強会を行う。

グループ討議②

【親教育】
・魅力あるまちにすることは大切だが、子供たちがまちに残って仕事があるのか？
→外に出ればいろんなものが見え体験もできる。外に出てわかることもあり、その経験を活かせる。
→昔も選択ができなかったわけではなく、残った人は高田が好きで残った。
→震災後に高田に光があたった。これまでのままではダメだと親世代も勉強している。
→ものおじせずに外にも出ていける子供を育てる教育が必要。

→学ぼうとする意欲があるかないか？知識だけではダメ。
→やる気にさせる親が必要。柔軟な対応。でも、人それぞれ。
→40 年前、集団就職で皆外へ出て行った。今はもう一度高田に対する誇りを認識してきている。

【地域と教育・子育ての関わり】
・地域で子どもをどうやって育てていくかの意識を持つことが必要。
→親自身が必死に関わる。地域で関わる。
→昔は子供を地域で育てていた。子供の頃からさまざまな世代の人と関わることが大事。
→祭。七夕など、準備から反省会まで子供なりに参加して学んでいく。
→運動会は順位をつけないようにしているが、負けることで覚えることもある。
→震災後 2 年間運動会が開催できなかった。その思い出がないのは子供だけじゃない、親も同じ。
→市民運動会、町民運動会、復活したらいい。

・教育の中に地域行事の連携。
→産業まつり、スポーツイベント等、市が行うイベントに生徒（中学生）を参加させる？当日だけでなく企画、準備、当日運営に一貫して関わる→行政・教育機関の理解が必要。
→子供が来ると親も来る。参加して「地域活動」「地域のために〇〇する」ことを学ぶ。昔はそれが自然にできていた。
→スポーツイベントの場合、通常の学校のグラウンドだけじゃなく、街の大きな会場での経験が身になる。準備や整備もすることで、次に使用する人へ引き継ぐ気持ちも生まれる。

・陸前高田市民として市をよく分かっているか？どこで学ぶことができるか？
→古き良き時代を残して欲しい。子供たちは自分で過ごし方を作っていける。これがはすごいこと。

【高田独自の特徴のある教育】学力以外
・「高田の子供はこんなことができる」「こんな考えを持っている」等、高田の子なら…という理念を持つ。
→地元にあるものを活かしたもの。（地元学）
→車両に横断歩道を譲ってもらったら、運転手に挨拶する。これは高田ならでは教育。

グループ討議③

【親教育】
・子供たちを全面に出し、親は裏方からバックアップするまちを目指す。
→「これからのまちは若い人が作っていく」と言われるが、その知識を持っているのが上の世代。各世代がそれぞれに仕事をして連携していかないとダメ。

【地域と教育・子育ての関わり】
・高田の子供が、全国の子供たちと交流できるものが必要。
・学校と地域のかかわりが薄くなった。
・先生は異動するので学校に頼るだけではなく、地域がその中に入っていく必要がある。例えば、気仙中 3 年生が七夕太鼓のお囃子を地域の方から学ぶのは素晴らしい。
→良いものを残すしくみが必要。
→今後、学校統合が進んでも継続できるか？
→保護者が集まって文化やその他について話して決めていけばいい。
→大きなお祭りがない地域でも市内のものを取り入れる。
→子供たちが参加できる小さな規模のお祭りは沢山ある。
→地域コミュニティの再生に子供や学校も巻き込む。そこで親のコミュニティも再生する。
→高田の子ども達はすごく頑張っている。それが高田の財産。彼らがなければ将来の高田はない。

・子供たちが高田の地域を知ることは防災にもつながる。
→先輩からの教えを引き継いでいくしくみ。その一つのツールがお祭り。学校、地域ごとに違いが

あるが、地域らしさが高田らしさ。それが伝統として残っていけば良い。
次の世代に引き継いでいくことで、『高田らしさ』という地域色が出る。
→中学校の文化祭で、七夕の歴史を調べたものが素晴らしかった。お祭りを通して勉強していける。「お祭りの時には帰ってきたい」が大事。

【人材育成】
・企業されている方がもっとアピールできる場はないか？
→子供たちが子彼らの活躍について知る機会があればいい。
→東京に行ってお願いするのは難しいが、今なら高田に講演に来てくれる人は多いはず。
→講演会などで直接話を聞いて伝えていく。
→同時に地元企業の元気なところも見せる。まちを作って仕事をする場。
→「夢は必ずかなう」と伝える教育。諦めない心を教育に組み込む。
→東京の大学で講演した際、学生がシャンとしていた＝小学校を受験したような学生たち。このような学生と地元の子供たちの交流があればいい。学びの部屋に来ていた学生との交流とか？ついでに親も交流。

(4) ワークショップ検討経過

内容	提案意見
教育・子育て	＜学力向上＞ ・地域での学習サポート ・「学びの部屋」事業を小学校にも取り入れる。 ・リタイヤした方々をシニアボランティアとして学習サポート人材に。 ＜人材教育＞＜親教育＞ ・外に勉強に出ても戻って地域経済を活性化するバイタリティーを持った子供たちを育てるために…自分たちのまちを自分たちで作っていく意識を親が持つことから始める。 ＜地域との連携＞ ・親や地域が学校教育に積極的に関わる。 ・学校と地域の関わりを強くする（地域行事に生徒を参加させる等）。 ・各世代がそれぞれの役割をこなし、連携して伝えていく。 ・お祭りは、高田らしさ、伝統、防災等多くを学ぶことのできる地域にあるツール。 ＜人材教育＞ ・市内外で活躍する企業人（働く人）の話を聞ける場を設ける。

地域色が出る
高田らしさ

・保護者が集まって話をする

祭り、地域行事

次の世代に
引きついでいく

地域を知る
↓
防災教育にもつながる

教育・子育ての新しいまちづくりのイメージ

・10年後、20年後見すえて
長期　短期
若い人への支援
(親)

・勉強
自分で起業できる人
子供を育てる（人材育成）

学力

子供たちのかがり
子供と面倒に
親は考え

陸前高田の地元学

今までできなかった経験

高田の文化
教育

親教育
（高田の文化・ほこり
きょうと愛を育む）

地域とユーティ

・学力向上のために
保・幼からキバンを作ればいい
・小学校　宿題がいがいと多い
学童に先生を配置
以外

学びの部屋みたいな

・小学校バージョン
・シニアボランティア

・外に出ることで、
高田の良いところが
見えてくる

学力　文武両道
学ばうとする意欲

・町民運動会

起業→子供達に夢を
持たせるような
活動をする
「知らせる」

地域企業の
人にはる
人「みせる!」

・音楽会

※ 教育・子育ての新しいまちづくりのイメージ ①

そらさんと、ず 震災前から聞いた。大隅に3度目の相談。

10年後 20年後を見すえた
長期 短期で具体的にかなえられる
目標 子どもは日々成長する。
第二、第三の人生の中に本格的募。
子育てを高田で好きだ。 遊び場でない
広い敷地で好きに作れる 学校の問題あり
被災者だから共感社会

(震災後のエセ仕事作りの様を考えた仕事)
まず動機。この学びがけでは難しい。
長期が終っても、なりわいは難しい。
もっと、産業で、もっとベンチャーたちあげる
どうしたら子供を育てる。 高田で雇用は少ない。
人材育成 会社も財政ひっぱ

このまちを作っていくのは、今であれば自分の代
その次は子供たちでできるようなこのまちで
今まで、ココでできなかった経験ができる
ようなまち → それから数がみえるものを作ってる。

子どもの学ぶ力について
学びを向上する為の具体的なビジョン。
↓
どうにしても 震災前は多くもっていなかった
高田市内には広くエリアあった。
今も市で学ぶ場があるが、動線、
連絡ができない。
高田高校も移転して、まとまっていく。
その前の、小・中から底上げをしていかないと。
教育は、長い教育。
高田独自のシステムを、市民の意見を聞いてありがっていきたい。
保育園も 学んでいる。
震災後 今、管理者が対応している。 自分の仕事が決まるなかで、その先がどうなるかの不安がある。
学校のキリカも問題が出ている。
住民の意識を、子どもの為に何ができるか
インフラが整って、教育・文化が育まれるまち
大事 子どもが小学生、教育より子育て。
ものすごい環境の変化。できるものが、できなくなったりして。
昔は、ゆとり教育とよばれた。
教える数が減ったり、仕方が?

教育 ③

地域差。学校で補えない部分は家庭で
学童は現状足りない。
もっと、専門指導はないが、教育を改革する。
学びの部屋(中学校にある) → 空教室を利用。
↳ これを小学校にも設置する
地域での学習サポート。 オンライン利用
高齢者の人材を、サポート役に利用する
部活動が欲しいのでは? → そこ、
環境ができないとできない。
仮設住宅だと、勉強スペースがない。
集会場も閉鎖している所もそうでない所
だと使用するにも。仮設内と中学生と男とも
だと少人数では狭くにい。 孤独がいる
自分に入れるようにしていても様々
子ども次第。 学校のあり方も考える
文部省は図書館の利用が多い。 教師で
一人で勉強するのは難しい。 教が減少
学校の空教室 → 友だちもいる
が利用できるといい 親も安心。
仮設 同じ環境をもった友だちがいる環境

教育 ④

将来帰ってくる子供たちに、どんな魅力的なものを高田につくるか?
一度、出て、勉強して、立派になった人もいる。
震災後、帰ってきても、この場で企業していない
親教育 小さい時から「こんなとこうだいるよ」を
ずっと言う。
↳ 数が多くなる。 所を伝えて言っていた。
コミュニティが小さすぎて、高田全体で考えられ
ない。なる 数がいる。
しっかりしている。
子育てとして感じるのは教育で、
自分たちのまちを自分たちで作っていくという
自覚を親から。
"も"感じている。環境のヒントは子どもたちにも
親同士のコンセンサス 勉強会
↳ 意識を変えて、その親を増やしている。

親教育 ⑤

学ぶ持ちがわかる。でも
まちに残って仕事があるか? ないか?
外に出れば、いろんなものが見える。経験できる
高校まるまで高田にいたが ここにいたから
センスができなかったわけでは ない。
外にいってわかることもある?
それが見えない

元のいけカメラマン(CM)。
企業に勤めているが、仕事がない。カメラ分野
この分野を、地域の方が、あまりわかってない
ムダなものが入っていけない。
自分の番ほっかみたい。皆にわかってもらいたい。
震災後に、来られた。これまでとは違う
新しい、数を知識してもらっている。
ものおじしないような教育。 (知識だけでは)
学ぼうとする意欲があるかないか?
やる気にさせる 熱 → どうなんなんと熱 対応。
↳ もんそれぞれ
残っている人は、皆さまで考えた。

仕事 ⑥

仕事 集団じゃなく。
もう一度、高田に対する思いより、まちんしまっている
一度出たから、それを、高田に活かす
地域でどうやって育っていくかの意識を、
持つのが少数。
地域で育てていた環境がある
親から、社会人 の人と関わる。
親自身が学ぶ。 関わる。
地域で関わる。
祭、七夕、準備から一緒に見て。
反省会にも子どもなりに参加して
学んでいく。持続することが大事。
運動会は根本性やっけないようにしている
頑張ることで学ぶこともある
震災後、3年間できなかった。その経験が
ないのは、親も一緒

市民運動会 - (昔あった)。町民運動会。 ⑦

復活したらいい。
それも反省会が あった。 ある。
子どもも学べる。
七夕がある。 参加型
スポーツの場合 年でやるイベントに学校。
中学生をうまくつかえないか?
子どもがいても親を参加する。 子育て。
企画、準備、設営とかから。 ボランティア
参加して、地域活動に参加して学ぶ。
地域の為に○○する。ことを学べる
昔は、それが自然に多くできていた。
学校だけでなく、該当する生徒が全部やる。
スポーツのイベント(大きなグランドでやることが
いい経験になる
自分の学校のグランドだけをなくて、まち場の
グランドを作って、整備して帰る(次の人が使うから)
陸前高田市民として、市をよくわかっているか?
どこで学ぶことができる。

古き良き時代を残して欲しい。 ⑧

・ワクワクに新田から、子どもたちが引き来ている。
自分たちで遊ぶ方を作っていける → すごいこと
高田独自の特ちょうのある教育
学校とは以外。
(高田の子どもは、こんなことができるんです
こんな考えを持っているんです
理念: 高田の子なら…という。
自由にホッキ貝をとりに行きたい。
昔は先生もゆったりしていた。
無地元にあるものをいかしたもの。
運転していて、横断工事をしてあげたら。
お礼のおじぎをするのは、高田ならではの
教育。

子どもたちを前面に出して、数が来る。 (数字、対象がを多くの)
バックアップ → そんなまちを目指す
「これからのまちは若い人が作っていく」と学ばれる
その知識をもっているのは、上の世代。

各年代がそれぞれ仕事をしないとできない ⑨

10年、20年後、地域に愛を。 ⑦ 参加する

子供が参加すると、親も。
子供が全国の子供たちと交流できるものが
必要。外に出ていくのは修学旅行だけ。
学校と地域の関わりがあまりなかった。
↳ 先生は悪かった。地域が先の中に入っていかない。色々学ぶ。七夕のタイプを 中学3年が
学ぶのは スケジュイ。 今の人たちが考える
良いものは残すしくみがないと。 文化
学校の仕方が進むとできるか?
↓ 連携をもってはい
直接外を嗅がい地域に合わせて欲しい。
↳ お祭りの期間でも休みが、終わらないように遊ぶ。
どんどんしまいが高くなる。時間のようにはいかない。
学校で、保護者が集まって、文化や。
その他について、話して決めていけば。
大きなお祭りがない地域、学校はない。
でも、高田のものを取り入れるとか

教育 ⑩

子どもたちが参加できる。小さな規模のお祭りは
たくさんある。

地域コミュニティを再生するのに子供を巻き込む。
学校も巻き込む。 → もっと親のコミュニティを再生。
高田の子どもたち すごくがんばっている
高田の財産 → 頼りがいがあるは将来の
高田にない。
高田の地理を学ぶ。 防災にもつながる
先輩からの教えを引き継いでいく。
それのツールが お祭り。 学校、地域毎で…。
地域ごとに高田らしさ
それが伝統として残る。といいはず。
中学校の文化祭で七夕の歴史を調べた。ものがあった。
お祭りを通して 教育していける。 (お祭りの時には帰ってきたい)が大事。
ダンの作り方を学ぶ。

教育 ⑪

企業をやっている方がもっとかかわれる。 子どもたちとかかわれば。
(スポーツ) 地域に戻ってくる。
子供たちが 地域に戻ってくる。 難しい。 地元から離れる。
子供たちに 戻ってくる。
連携をもって、講演などで、伝えていく。 作る場の作成。
学校 まちを作っていく仕事をする場。 企業でもお教を
「若い人が多くなる」を伝える教育。 → 企業で
主体的に学ぶ。 数を巻き込む

学校が ショックを受けていた。小学校廃校 今 閉校していた。
高田の子どもたちは 知らない。
今の高田だから、企業の方を来てくれる。 地元の子どもたちの
地元企業が元気なことを見せる。 交流
子供にどんどん 刺激を与える。
学びの部屋に来ていた学生
との接触。
ついでに父兄とも交流

まちを愛する